120. 高照度光照射による痴呆高齢者の食事摂取量の変化について

○伊藤武夫 小山恵美 中野紀夫

宮永 和夫

大平信子 上村真代美 駒形美枝子

(松下電工株式会社)

(群馬県精神保健福祉センター)

(特別養護老人ホーム八色園)

【背景・目的】

生体リズムが弱体化した高齢者に対して、午前から日中の時間帯に高照度光照射を行うことにより、昼間の覚醒度が上昇して夜間の睡眠が改善されることや痴呆高齢者にみられる夜間の異常行動が緩和されることなどの報告がされている。しかし、それらは主に夜間の時間帯にみられる変化に関するものであり、活動時間である昼間の行動内容に関する報告は少ない。そこで本報では、昼間の活動時間帯における高齢者の行動内容に主眼を置いて、高照度光照射の影響を調査することを目的とし、特に食事摂取量の変化について報告する。

【アプローチ】

本研究は新潟県内の多雪地域に位置する特別養護老人ホームの協力を得て行なった。対象は入所中の痴呆高齢者2名(83歳女性、90歳女性)で、研究内容について事前に家族の同意を得た。行動内容の評価項目は、3食の食事摂取量、食事その他行動の自立度、挨拶や声掛けに対する返事、表情の変化、覚醒－睡眠状態、車椅子の座姿勢などであり、食事摂取量は10段階、それ以外の項目は2段階もしくは3段階の主観評価とした。評価は多雪期である1月中旬に開始し、光照射実施前1ヵ月間と光照射実施中1ヵ月間の計2ヵ月間において毎日実施した。なお、食事摂取量は評価期間以外でも継続して記録されていた。光照射は、顔面付近の鉛直面照度が2500lx以上確保できる卓上型の照明器具を利用して、朝食の時間(8:00～9:00)、午前のコーヒータ임(10:00～10:30)、昼食の時間(11:30～12:30)の計3回に分けて行った。

【結果・考察】

対象者Aにおいては、光照射を実施する前の食事摂取量は少なく不安定な状態であったが、高照度光照射を開始して1週間程度経過すると、食事摂取量が増加し安定していく傾向がみられた。しかし、光照射を終了すると約2週間の経過で再び不安定な状態に移行した。3食の食事摂取量の経時変化を下図に示す。その他の項目では、食事の自立度に改善傾向がみられた。

対象者Bにおいては、高照度光照射を実施する前から対象者Aに比べて食事摂取量は多く安定していたが、高照度光照射を開始すると、さらに増加安定する傾向がみられた。しかも、光照射を終了しても少なくとも1ヶ月は継続して安定していた。その他の項目では、食事の自立度や昼間の声掛けに対する返事について改善傾向がみられ、昼間の時間帯にベッドで横になっていることも減少した。

今回の結果は、高照度光という同調因子により生体リズムが安定していく過程が食事摂取能力の変化にも反映されたものと考えられる。特別養護老人ホームでのフィールド研究において、高照度光照射により食事摂取量が増加し、安定する傾向がみられたことの意義は大きいと考えられる。

図 対象者Aの食事摂取量経時変化

Eating amount of an elderly with dementia before and after the bright light exposure.

Takeo Ito, Emi Koyama, Toshio Nakano, Kazuo Miyanaga, Nobuko Odaira, Mayomi Kamimura, Mieko Komagata.